青山学院大学・青山学院女子短期大学　共催フォーラム

3.11 あの日を忘れない–東日本大震災と青山学院

山本 正徳
宮古市市長

本州最東端のまち岩手県宮古市は、平成23年3月11日に発生した東日本大震災大津波により、多くの尊い命、貴重な財産を失いました。
宮古市はいま「住まいと暮らしの再建」、「産業・経済復興」、「安全な地域づくり」を復興の柱に据え、市民による参画と協働を基本とし、まちづくりを進めています。
青山学院女子短期大学をはじめ全国の皆様からのご恩に報いるためにも、活気・笑顔あふれる宮古市をつくり上げてまいります。

仙波 憲一
大学学長

東日本大震災と福島原発事故による不安感と絶望感が漂う中、将来の可能性を垣間見た。政府が救援・復興等への方向性を出すのに戸惑っている間に、人々は迅速にボランティアや必要生活物資の搬送、募金等様々な活動を始めた。いてもたってもいられない人間としての連帯感を持って秩序高く、様々な立場から支援した。市民が社会を支える好例であった。フォーラムを通じ、経験したことから共に学び、それを後世に引き継いでいきたいと思っている。

平澤 典男
大学副学長

テレビの映像で見た 3.11の光景はあまりにも厳しいものでした。自然の猛威の前に私たちはひとりではあまりに無力であることを知り、その後の政府の救援活動の遅れにいらだちと疑問を持ちました。しかし、その隙間にボランティアを通してひとりとひとが直接つながること、直接行動することの価値に気づいたのではないでしょうか。震災と同時に記念館に9000人の帰宅困難者を受け入れる体制が作られたこと、直後に学生たちが立ち上がりボランティア・ステーションがつくられたことは「地の塩、世の光」をスクール・モットーとする本学の本質が表現されたものと感じています。

八耳 俊文
女子短期大学学長

女子短大では東日本大震災発生 4 ケ月後に学生と教職員からなる被災地支援ボランティア「ブルーバード」を派遣しました。以後、学校の長期休暇を使っての派遣も 5 回にわたります。私も参加しましたが、現地では何回も「宮古を忘れないで欲しい」と言われました。当時は凄まじい震災の残痕を目のあたりにしてどうして忘れようかと気持ちとなりましたが、3 年近くが経ち、被災地に流れる時間を共有できているかとの問いは日々迫ってきます。私からは、これまでの短大の「ブルーバード」の活動を紹介します。

杉浦 勢之
大学総合文化政策学部長

帰宅できなくなった学生たちや「帰宅難民」の方々を構内で朝まで見守った「あの日」の記憶は、いまでも鮮明に浮かびます。震災は一瞬にして社会の表層を打ち砕き、亀裂を通じ、日常では見えない私たちの社会の深層、根源を露わにします。復旧から復興へ震災地の課題も変わりつつありますが、「あの日」が教えてくれたのは、その「根源」であったと思います。それを忘れないこと、それが私たちの社会の「復原」ということであり、共に生きるということだと思います。

佐々木 千穂
青山学院大学
国際政治経済学部 2 年

–どこが何なのか分からない。がれきの山々、ぐちゃぐちゃの物体が広がっているだけ–
2011年3月22 日。一変した岩手県宮古市への里帰りをそう日記に綴りました。その後の4度は青短・東日本大震災被災地支援ボランティアチーム Blue Bird の一員として訪れました。
被災者と支援者などという壁をなくし、共に生きるように寄り添う活動をしよう。水圧洗浄機を持っていた手にはハンドベル。活動内容が変わっても、OG となっても、仲間と力を合わせその一心で復興のかけらを紡ぎ続けています。

瀬川 達也
青山学院大学
経営学部 4 年

「東北のために何かしたい。」3.11のあの日、当時大学一年生の自分に何ができるのかを考えていました。大学ボランティア・ステーション（AGU-VS）の発足が、青学生にとって社会と関わる大きなきっかけとなりました。『東北のために何かしたい』という思いを持つ学生がお互いに尊重し、協力することで、社会においてさまざまな希望を産み出すことができると思います。“学生だからこそ” できることがあるということを、AGU-VS の活動を通して多くの学生が感じ取って欲しいと思います。

青山学院　〒150-8366 東京都渋谷区渋谷4-4-25